俳句（三）

宮蛍

初ツバメ卯月半ばにまだきも来（く）

真青なる空に俊技の小次郎や

啓蟄の名にし負はゞと藪蚊出ず

風寒く早春賦とに身を過ごす

寒戻り啓蟄返す春おぼろ

綿入れを出しみ仕舞ひみ春おぼろ

スーパーに七草粥の春パック

春雨に緑染め行く丹沢や

秦野住みけふのお山はと習い性

雅散る風も泣くかや雅子の忌

雅散る雅散る散る雅散る

呼子鳥こゑすら聞かず逝きにけり

舞姫の椿のごとく舞ひ落ちぬ

花柳とつけし所以ぞしのばるる

人逝けゞ春やあらぬの年となり

われプータ花見の候の恐ろしや